

災害時にお寺が果たした役割

谷川 海明

- ① その時に何が起こったのか
- ② 避難所になった経緯・決断
- ③ お寺の役割

平成二三年三月一日午後二時四六分 東日本大震災発生

震源地は宮城県牡鹿半島の東南東一三〇km仙台市の東方沖七〇kmの太平洋の海底を震源とする最大震度七、マグニチュード九・〇の地震が発生。

【被害状況】

- ・犠牲者…一万五八九四名（直接死）、三五九一名（関連死）行方不明者…二五五〇名〔二〇一七年七月一日現在〕
- ・建物などの被害額推計十六兆九千億円（建築物、ライフライン、河川、道路、農地、医療施設、文化施設等）
- ・関連死以外での犠牲者（震災が無ければもっと長生きした人もいる）
- ・震災の被害は現在進行形である。

【お寺の地理的環境】

- ・ 法音寺 宮城県石巻市 牡鹿半島（日蓮宗寺院は市内に二カ寺）
- ・ お寺は標高三〇メートルの高台にある。
- ・ 震源地より約一〇〇キロ西に位置する。
- ・ 震度は六強

【お寺の被害】

- ・ 本堂は一部損壊。お墓は三〇基ほどが倒壊。
- ・ お檀家さんの被害は全壊二〇〇件、半壊一〇〇件、その他一部損壊。
- ・ お檀家の方の犠牲者は五五名であった。
- ・ 本堂は仏具も倒れ、壁がひび割れていた為、使用せず後に物資の保管場所になった。

① その時に何が起ったのか

- ・ 大きな揺れに建物から飛び出す。まずは住職とお寺の被害の確認をした。
- ・ 津波警報が鳴り、避難してくる車の交通誘導をした。
- ・ 過呼吸になったお婆さんの家族から助けを求められた。
- ・ 津波到達までは約一時間の猶子があり、まだ避難していない老人の誘導。
- ・ 岩手や女川で津波が来たとラジオで流れ、ここにも来ると予想する。
- ・ 津波到達時は避難者三〇名と山頂より見ている。助ける事も出来ない。

- ・携帯電話も繋がらなくなる。津波到達によりライフラインも止まる。
- ・津波に襲われ水に浸かった方々が避難してくる。
- ・骨折している女性が運ばれてきた。助けて下さいと袖を引かれる。
- ・電気を使わないダルマストーブで暖を取る。
- ・避難者は本堂ではなく会館を使用してもらうようにした。
- ・濡れた人はお寺にある下着や衣類に着替えさせた。

【津波到達後の状況】※写真資料

② 避難所になった経緯・決断

三月一日夕 一日一食と決め、おにぎりを二〇〇個作り、避難者に配る。

三月一日夜 住職と母と三人で知人・友人・親戚の安否確認はしないと決め、避難者の受け入れに専念する事を決める。

三月二日朝 母方の祖父母が同じ町内（車で五分の場所）に居たので、どうしても確認したい旨と街の様子を見てくださいと伝え、自分一人で翌日朝の様子を見に行つた。祖父、祖母、叔父の生存を確認。夕方にはお寺に避難した。避難者と共に道の瓦礫撤去。

三月二日夕 避難してきた祖父が息を引き取る。祖父母は頭まで水に浸かり、低体温症であった。母に伝えたが、母は避難者の夕飯を作る事を優先し、何事もなかったかの様に作業を続けた。その後、祖父の遺体を

別の部屋に移した。

三月二日夜 住職、母、祖母、叔父と話し合い、祖父の死は避難者に伝えず、避難してきた人の命を繋ぐ事を優先に考え、支援が来るまで耐えしのごとくと決断した。

震災から五日目 腐敗が進む為、祖父の遺体を境内の空き地に自分たちで穴を掘り土葬する事を決めた。避難者にも祖父が亡くなった事が伝わった。火葬もいつできるか分からない状況であった。

その後は犠牲者の方々の相談が絶えなかった。住職はお寺にずっといなければならず、避難所の代表には副住職の自分になる事になった。

【街の様子】※写真資料①②

③ お寺の役割

【避難所としてのお寺】



①宮城観光バスが屋上に

- ・ 避難者の受け入れ。お寺の会館に約一〇〇名、駐車場の車に約五〇名の避難者。
- ・ お檀家の方々は三割程度。その他七割が檀家外、地域住民であった。
- ・ お寺は避難場所であった。避難所とは違う。避難場所はあくまで一時避難する場所。
- ・ 最初にした事は避難者名簿を作成する事であった。一日中親戚や家族が避難していないか、確認しに来る方が絶えなかった。
- ・ 自衛隊の車を止めて、地図を出してもらい、ここに（お寺）避難者がいる事を伝えた。
- ・ 近隣の集会所二か所と合わせて避難所申請を行う。（三月一二日）避難者二五〇名。
- ・ 最初に逃げたところが避難所となる。他の避難所に移る人は少なかった。
- ・ 支援が来たのは四日目の夜に自衛隊が毛布などの物資を配りに来た。
- ・ 本格的な支援は一週間後位から始まった。（公的な支援）
- ・ 民間の支援団体が一九日に到着（氷見市救援隊）



②自衛隊の行方不明者の捜索

- ・ 二日から一日に一五〇食の炊き出しを二回行う。
- ・ 支援拠点となる。物資の配給場所、医療拠点（医療チームの巡回）、給水拠点（最初は自分たちで沢から汲んできていたが、後に給水車が毎日来てくれるようになった）

【避難所の状況】 ※写真資料③

【お寺としての本来の役割】

- ・ 檀家の方の犠牲者は自坊だけで五五名。連絡を取る事も困難な状況で、全ての方のお葬儀が終わったのは、翌年の二月までかかった。
- ・ 遺族で相談に来る方が大勢いる。落ち着いてからお葬式をしましょうと伝えるしかなかった。
- ・ 火葬が市内ではできないと決められた。火葬をするなら県外まで自分たちで運ぶか、仮埋葬（土葬）する事になった。
- ・ お寺の境内が遺体を土葬する場所となった。祖父を含め檀信徒七名。（指定した場所に運ぶ手段が



③避難所の様子

無い。取り違えが起きる。腐敗が進む。) 土葬は違法行為であり、警察と自衛隊に相談したが、初めてのケースなので判断まで時間を要した。

・お葬儀をしなければならぬ。

・納骨したいが墓石も倒れ、石材店もどこから手を付けていいか分からない。

・火葬できた方のご遺骨を預かった。他宗派の方のご遺骨も預かる事もあった。

・檀家名簿の更新を随時行っていかなければならない。

※写真資料④

【お寺が避難所になる事のメリット】

・学校よりも小規模で環境が良い。畳で寝れる。暖をとれる。

・備蓄があった。米、食料、食器類、水源があり水も確保できた。

・火をおこして煮炊きができた。学校では危険とみ



④お寺の役割

なされ禁止されていた。

・トイレの問題。自坊は汲み取り式であった為、用を足す事ができた。下水道も被害がある為、学校などの公共施設はすぐにいっぱいになり、異臭を放っていた。

・小学校などは一五〇〇名に上る住民が避難した為、物資もある程度数が揃わなければ配る事が出来なかったが、小規模な避難所では持ち寄りで食べる事から始めた。

・常駐しているスタッフ（寺族）がいるが学校などにはいない。

・近隣住民が多いので、コミュニケーションが図りやすい。区長、住職、消防団。

・老人、子供を安心して残して外出できる。大人は仕事や親戚探しに行く。

・お寺が避難所になれば多くのメリットがある。そして何より多くの方の命を救う事が出来る。

【お寺が避難所になる事のデメリット】

・避難所となってしまうと公共施設と同じように扱われる。特にトイレ問題。（自分たちは山の中でトイレをしてい
たが、メディア関係者、医療チーム、支援団体もお土産を残していく）

・期限があるわけではなく、いつまで避難所が続くか分からない。

・常に避難者がいる状況で、外出する事ができない。

・建物に被害があっても行政は補償してくれない。

・避難所になり毎日食事を出していたが、燃料費、光熱費等も含め行政からの支給は、後になってから月3万円だけ
であった。

・お寺としての本来の役割が出来ない。

- ・長期化するほど避難者も支援慣れしてきて、要望が多くなってくる。
- ・行政の方で避難所の統廃合を進めてくれず、避難所解散時期について決断する事の難しさがある。(自坊では百箇日をめどに仮設住宅へ移ってもらった)
- ・お寺を避難所として開放する際のリスクを考えて、行動しなければならない。
- ・最初は自助の段階があり、次に共助、そして公助という段階がある。公助の段階になったら通常通りに住環境、仕事、生活を戻していかなければならない。

【災害時に求められるお寺の役割】

- ① 亡くなった方への供養・お弔いの役割
 - ・犠牲者の供養(葬儀・通夜・火葬・家族のケア)
 - ・納骨(ご遺骨の安置・ご遺体の埋葬)
 - ② 生きている人の命を繋ぐという役割
 - ・避難者の受け入れ(避難所)
 - ・協力して助け合う(自助、共助、公助)
 - ・地域の人々から助けを求められる(半公共的な施設という意識がある)
- この二つの役割があり、有事の際にはお寺・僧侶が頼られる存在である。